

Title	「明治末・大正期の京漆器意匠」について
Author(s)	佐藤, 敬二
Citation	デザイン理論. 23 P.55-P.59
Issue Date	1984-11
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52628
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

「明治末・大正期の京漆器意匠」について

佐藤敬二

「明治末・大正期の京漆器意匠」の研究は、京都の諸工芸の伝統を継承し、意匠の改善発展のための基礎資料作成を目的としている。近代京漆器の意匠・技法・材料についての資料予備調査及び研究計画の策定は昭和55年に行なった。その後「京漆器総覧編さん」（本号書籍紹介参照）の為の共同研究として取り組む事になる。56年には、京漆器の意匠及び技法・材料について、農商務省凶案及応用作品展や各種展示会を中心に「図録にみる大正期の京漆器意匠」の調査分析を、57年には「工芸意匠の動向と教育者の活動」について、また58年には「淡工家組織の活動と漆器意匠の傾向」についてそれぞれ調査分析を行なった。現在今年は「漆工家、杉林古香とその周辺」について調査を進めつつある。

今までの研究のうち京都市工業試験場研究報告No.11（昭和58年7月15日発行）とNo.12（昭和59年8月20日発行）所載の研究報告の概要を紹介したい。研究者はいずれも、佐藤敬二、山内明、岡本匡史である。

研究報告No.11（明治末・大正期の京漆器意匠 第1報）

——工芸意匠の動向と教育者の活動——

明治後期から昭和初期にかけて、工芸の教育機関として、京都市立美術工芸学校、京都高等工芸学校、京都市陶磁器試験場（大正15年京都市工業試験場に

合併)、京都市立第2工業学校がそれぞれ工芸界と密接な結びつきをもちつつ展開する時期である。明治末から昭和初期に至る京都漆工界の団体と展示会活動、指導者の啓蒙活動などを調査した。

要 旨

わが国における工芸産業近代化の基盤は、明治後期から大正期にかけて成立した。明治期には工芸産業の育成と工芸品の輸出振興を目指し、政府の勸業政策として海外博覧会への参加、内国博覧会や共進会の開催、海外伝習生制度など多くの施策がとられた。大正2年から、産業振興・輸出振興を目的とした農商務省図案及应用作品展覧会が開催されるに至り、ようやく工芸意匠の新しい試みが芽生えた。昭和2年の帝国美術院第八回美術展覧会に第四部・工芸の参加が認められるまでの期間は、漆器工芸界にとっても他の工芸と同じく激動の時期である。工芸教育界には優秀な人材が多く輩出し、さまざまな工芸意匠の試みがなされた。

主な項目

1. 大正期京漆器の概要
 - (1) 業界実態
 - (2) 業界振興施策
2. 大正期工芸意匠の背景
3. 日本の工芸とアールヌーボー・セセッション
4. 京都における工芸意匠の教育と指導

〔表〕

- 表1. 京漆器業生産額の推移
- 表2. 大正期京漆器業の推移
- 表3. 大正期に日本が参加した万国博・国際博
- 表4. 京都博覧会協会主催博覧会
- 表5. 京漆器関連主要雑誌刊行概要

表 6 京都市立美術工芸学校規則 漆工科実習程度 大正12年 3月17日

表 7 京漆器関連年表図 (教育機関・施設, 主な展覧会, 団体)

〔図〕

図 1 農展第一回図録と帝展第八回図録

図 2 神坂雪佳 (顔写真)

図 3 神坂雪佳図案 神坂祐吉作「月象乃図」手箱硯

図 4 神坂雪佳図案「六角飾箱」

図 5 中沢岩太 浅井忠 画

図 6 中沢岩太 陶磁器図案 (第一回農展出品)

図 7 浅井忠 (顔写真)

図 8 浅井忠 図案 杉林古香作「菓子鉢魚網」漆器

図 9 沢田誠一郎 (顔写真)

図10 沢田誠一郎「草花模様」漆器書棚 図案 (第二回農展出品)

図11 沢田誠一郎図案 戸嶋光孚作「手元棚」漆器 (第一回農展出品)

研究報告No.12 (明治末・大正期の京漆器意匠 第2報)

——漆工家組織の活動と漆器意匠の傾向——

明治末・大正期の漆工界の団体と展示会の活動, およびそれら展示会図録に見る漆器意匠傾向の概要について調査した。

要 旨

京都漆器業界の近代的な組織化は, 明治13年の「漆器商組合」設立を最初として, 以後明治中期に美術界, 工芸界を網羅して結成された京都美術協会の発足を見た頃から, さまざまな形で進行した。大正期も含めて, それらは20数団体に及ぶ。これらの団体は, 各種の展示会活動を行ない, その成果は, 京漆器意匠の展開にとって大きな刺激となった。

またこれらの団体の展示会活動については、明治初期の図版印刷の進歩もあって、各種の図録を通じて、その意匠の概要を知ることができた。明治末・大正期の漆器意匠については、①西洋意匠の導入 ②新しい日本様式確立への努力 ③伝統的意匠の継承 ④独自作家様式の確立、の4種の傾向として把握できた。

主な項目

1. 京都漆工界の主な団体と工人達
 - (1) 京都漆器同業組合
 - (2) 京都美術協会
 - (3) 奨美会
 - (4) 京都漆工会
 - (5) 京都青年漆工会
 - (6) 関西美術会・関西美術院
 - (7) 京都四園
 - (8) 佳美会から京都美工院
 - (9) その他の工芸団体
2. 当時の主な展覧会と図録
 - (1) 農展図録にみる京都漆工品
 - (2) 美術工芸展覧会図録にみる漆工品
3. 各種展覧会にみる京漆器意匠の考察
 - (1) 西洋意匠の導入
 - (2) 新しい日本様式確立への努力
 - (3) 伝統的意匠の継承
 - (4) 独自の作家様式

〔表〕

表1. 行政通達と漆器業界の組織化

- 表 2 新古美品展受賞製品作者別一覧（大正元年～2年）
- 表 3 明治年間の主な国内の博覧会・競技会・共進会・品評会（漆器関連）
- 表 4 漆工競技会一覧
- 表 5 主な工芸研究団体と漆工関係参加者
- 表 6 大正期漆器関係各種展覧会図録・目録
- 表 7 大正期農展受賞製品製作者別一覧表
- 表 8 美術工芸展入選製品製作者別一覧表
- 表 9 農展にみる沢田誠一郎案・セセッション様式漆器意匠例

〔図〕

- 図 1 浅井忠図案 杉林古香作 「木菟」用箋箱（関西美術会第六回展出品）
- 図 2 第一回美術工芸展会場
- 図 3 江馬長閑作 「静寂硯箱」「静寂」硯箱
- 図 4 水木平太郎案 木村秀雄作「マルホフ式模様蒔絵」重箱
- 図 5 迎田秋悦作 「人物図」水注（第一回美工展出品）
- 図 6 三上治三郎作 「布引」文台硯箱
- 図 7 山田楽全作 「乾漆柿」香合

尚、本研究の参考文献としては数多くある中で各種展覧会図録以外に、調査により所在が明らかになった、柴崎家所蔵の柴崎風岬発行、「日本漆器新聞」大正12年～昭和8年（のち汎工芸と改題）。京都美術協会発行の「京都美術雑誌」明治23年～25年、「京都美術協会雑誌」明治25年～38年、「京都美術」明治38年～大正8年。日本漆工協会発行の「日本漆工会雑誌」明法33年～昭和2年。が有力な参考資料となった。